

平成27年9月15日(火)

老球の細道164

コーチのアンガ―(怒り) マネジメント

会津バスケットボール協会 室井 富仁

バスケットボール部における卒業生の思い出話を聞くと、私にどのくらい怒られたか、どのくらい体罰を受けたかの話で盛り上がる。終わってしまった過去の思い出だから笑って話ができるのだろうが、当時はそんな大らかな気持ちでは受け止められなかっただろう。さぞかし悔しくて、恥ずかしくて、情けない気持ちでいっぱいだったに違いない。それを何も知らずに若いころの私は、体罰も辞さない厳しい指導が選手たちのためによかれと思いき勘違いの指導を繰り返してきた。だから全国への道は遠かった。

今年度最後の第6回「コーチングスクール」(毎月1回)が9月7日(月)に無事終了した。最終回は「コーチのリスクマネジメント」と題して色々な場面での対処法について経験談を交えて話をした。特に選手の生命とケガ、コーチ自身の生活や職業にリスクを及ぼすようなことは絶対避けなければならないことをポイントに話をした。その中で現在最も問題になっているのはコーチの怒りからくるパワーハラスメントの問題である。

ちょっと前までのスポーツの指導というのは、強くなるためにはスパルタ指導が常識であった。しかし、子どもたちの生活環境が変わり、以前のような厳しい指導に耐えられる選手が少なくなってきたことから、昔ながらのコーチの怒る指導は通用しなくなった。

コーチが選手に対して怒り、パワーハラスメント、暴力までにいたる原因は、「俺がこんなに一生懸命に教えているのに、なぜできない、なぜわからない、なぜやろうとしない」のやるせない気持ちから起こってくる。勝つことへの執着が強くなればなるほどこの気持ちは倍増する。そしてやがて爆発し、大きなトラブルに発展する。

熱心なコーチほど、選手は「私のところでバスケットボールがしたい」という強い意志を抱いて入部して来ていると思いついで、選手と強い絆で結ばれているかのように誤解する。その過信が選手に対して少々のは許されるという錯覚を生み出し、言葉の暴力、体罰などの誤った指導に進んでいく。

「選手はコーチが考えているほど考えてはいない」、「選手はコーチの真摯な姿勢と思いやりを真に理解するまでは、コーチの知識や技術や話に耳を貸そうとはしない」、この二つの冷徹な現実をコーチは直視ししなければならない。その上で自分自身がどのような時選手に対して怒りを感じるのかを知り、それをコントロールする術を持つことが選手を伸ばすためにも、自分の身を守るためにも大切なことである。

コーチの神様ジョン・ウッデン曰く、

「選手を育てるのに銃は必要としない」

日本バスケットボール界の智将・星澤純一氏(元金沢総合高校コーチ)曰く、

「30数年間のコーチ生活で一度も選手に暴力をふるったことはない。研修によって自分の指導の質を高める学びの姿勢は暴力行為の無意味さを知る機会となった」

怒りなくなったら深呼吸しよう。数字をカウントしよう(先日人間ドックの胃カメラ検査で実践してみたなら、今までの苦痛が嘘のように終わった。怒り同様胃カメラにも効果)。

「怒りは豚のえさにくれてやれ。“信”のウエアに身を包み、“忍”の椅子に腰をおろし、じっと待とうホトトギス」(J. N. フーミン)